寺子屋
terakoya　ridiamo
リディアーモ⑤

免許返納

「寺子屋リディアーモ」では、読者のみなさんといっしょに考えていきたいテーマを取り上げます。今回は「免許返納」について。

今号の[寺子屋リディアーモ]の先生

志堂寺 和則 先生

九州大学大学院システム情報科学研究院教授、専門は交通心理学。日本交通心理学会副会長。著書（分担執筆）に「交通心理学」（北大路書房）など。

ドライバー第一世代

全国的に65歳以上の運転免許保有者数、その割合も年々増加しています。また80歳以上の人の約4割が免許を持ち、その約半数の人は、ほぼ毎日運転をしているという統計もあるとされています。

自動車が急速に普及したのは1960年代。当時、免許証を手にした私たちの親世代は言うなれば「ドライバー第一世代」。「免許証を手にした世代が高齢化」という前例のない事態に、私たちは今直面していると言ってもいいでしょう。

前例がないから戸惑う

私たちの親世代は、「自分の親が高齢ドライバーになった」という経験がありません。そのため、どのようなタイミングで運転を辞めるべきかということも判断することが難しくなっています。その上、個人の性格や、生活環境、親子の関係など、一概に「こうなったら免許返納するべき」というガイドラインが出せません。親の運転に不安を持っても、免許返納後、親の外出機会が減って、老化が進むかもしれないという不安や、自分自身の時間を削って「親の足」にならないといけなくなることが今は難しい、などといった理由でなかなか切り出せないということもあるでしょう。

それでも免許返納をしてほしい

また、高齢者ドライバーの事故のニュースが報道されると、「家族はどうして運転をやめさせなかったのか」といった声が聞かれます。免許返納をしてほしいと家族が願っても、「車がないと不便」「まだ大丈夫だから」と一向に聞いてもらえないというケースも少なくありません。そんなとき、私たち子ども世代は、どうしたらいいのでしょう。皆さんで考えて行きたいと思います。

免許返納のこと、ちゃんと考えよう

本当に免許返納が必要？から始める

免許返納にあたって、まず最初に必要なことは、「高齢者は免許返納するべき」という風潮に「流されない」ということです。本当に免許返納が必要かどうかを見極める、運転のレベルを把握するということが重要です。親が運転する車に同乗して、急発進や急ブレーキなどないか、車にこすったようなキズがないかなど、様子を観察し、その上で、冷静に判断しましょう。少し不安があるようなら、いきなり免許返納ではなく「補償運転」を勧めます。「補償運転」とは、雨や夜間、長時間の運転は避ける、行ったことのない場所へは行かない、慣れた道を走る、といったことです。また、「衝突被害軽減ブレーキ」や、「ペダル踏み間違い急発進抑制装置」などの機能が備わった安全運転サポート車（サポカー）への乗り換えも考えてみるのもいいでしょう。いきなり免許返納をさせて、外に出なくなって気落ちしてしまうようになってしまっては、メンタル的にもよくありません。まずは「安全に乗る」ということから始めてみてはいかがでしょうか。そういった「予防」をしながら、親と免許返納のタイミングをはかり、今後のことを計画立てて準備していきましょう。

交渉上手になる

免許返納を親にお願いすることは、いわば「交渉ごと」です。大切なことは「感情的にならない」こと。まずは、親の気持ちをきちんと聞いてみましょう。なぜ免許返納をしたくないのか、そこには必ず何かの「こだわり」があります。その「こだわり」への対応を冷静に考えましょう。また、その「交渉人」に適した人物は子どもとは限りません。親しい友人だったり、他人の方がうまくいく場合もあります。そうして、親に納得してもらえるよう、上手に交渉していきましょう。車にかかる維持費を明確に算出してみるのも一つの方法です。

子どもも覚悟を決める

交渉するにあたって、必要なことは、親子の信頼関係です。日頃、顔を見せない子どもから、突然「免許返納して」とだけ言われても、親は困惑してしまいます。免許返納後の生活について、可能な限り送迎する、タクシー代などの交通費を援助するなど、親の身になって考え、その不安をできる限り取り除く。子どもは、親とこれまで以上に深く関わる覚悟が必要になってきます。

私たち自身も準備を

親世代は高齢ドライバーについて考えることがなかった世代です。初めての経験で困っている世代。そして、私たち子ども世代は、その困っている様子を見ている、学べる世代です。自分の将来について、準備をしておくことも重要です。人によっては居住地を変えるなど、発想の転換も必要になるかもしれません。

親の気持ちを知る

免許返納は人によってとりまく環境や、本人の性格など個人差があり、「こうすればいい」ということはありません。大切なことは親とコミュニケーションをとること。免許返納をひとつのきっかけとして、親との会話を増やして、親の気持ちを知り、理解するということをしてください。結局はそうすることが成功の鍵といえるかもしれません。

まずは「運転能力」を把握しよう。

運転経験が長くなればなるほど、運転に「慣れ」が生じるもの。一時停止したつもりが、実際は徐行しただけで一時停止していなかった、信号を確認せず、周りの車の動きだけで判断するなど、思い込みで運転をしたり、運転そのものが雑になりがちです。その上、加齢によって、咄嗟の判断や車の操作に遅れが出やすくなります。

まずは、運転に必要な判断や操作能力が低下していないかどうか。家族も本人もしっかりと把握、自覚することが大切です。

「同乗観察」のチェックポイント22

1. 車にこすったようなキズはついていないか
2. 車が汚れたままになっていないか
3. 鍵の置き場所を忘れていないか
4. 急ブレーキや急加速が増えていないか
5. まっすぐ走れずにふらついていないか
6. 車の流れにスムーズに乗れているか
7. 一時停止は停止線手前で止まれているか
8. 近づいてから変わる信号に気づけているか
9. 信号のない見通しの悪い交差点で左右確認が充分できているか
10. 右左折や車線変更のウィンカーを忘れてないか
11. 他車からクラクションを鳴らされていないか
12. 左折の際に巻き込み確認ができているか
13. 右折の際に右奥からの歩行者を確認できているか
14. 曲がる際にハンドルを手荒に操作していないか
15. 反対車線を走りそうになっていないか
16. バックでの駐車に苦労していないか
17. 駐車枠内へ入れるのに何度も切り返してないか
18. 駐車枠の中央に止められているか
19. 目的地や道順を忘れたりしていないか
20. 道路標識の意味を忘れているようすはないか
21. 乗っていて車酔いしなかったか
22. ヒヤリ、ハッとすることはなかったか

『大切な親に、これなら「決心」させられる！　免許返納セラピー』（志堂寺和則・監修、講談社・刊）

免許返納説得に悩む方へ

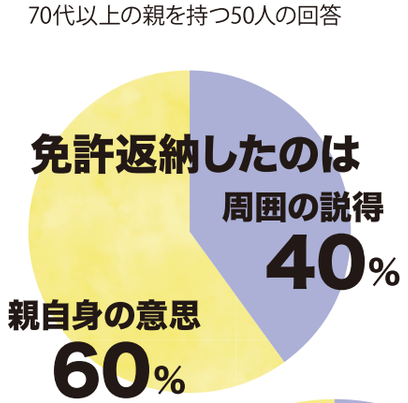
大切な親に、これなら「決心」させられる！
免許返納セラピー
志堂寺和則・監修、講談社・刊

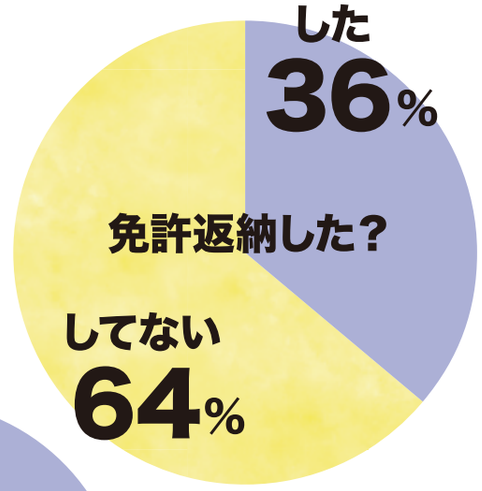
上記のチェックポイントのほか、無料で「運転能力診断」ができるウェブサイトを利用してみるのもいいでしょう。また、ドライブレコーダーは事故の際に役立つだけでなく、自分自身の運転を客観的に見ることができます。そのほか、月額料金が必要になりますが、専用車載機を設置して、スピードオーバーや急加速、急減速などの運転挙動をリアルタイムで家族のスマホやPCに情報を送ってくれる運転見守りサービスもあります。そういったデータがあれば、免許返納を促す際に、強力な説得材料にもなるので、利用するのも一つの手段です。

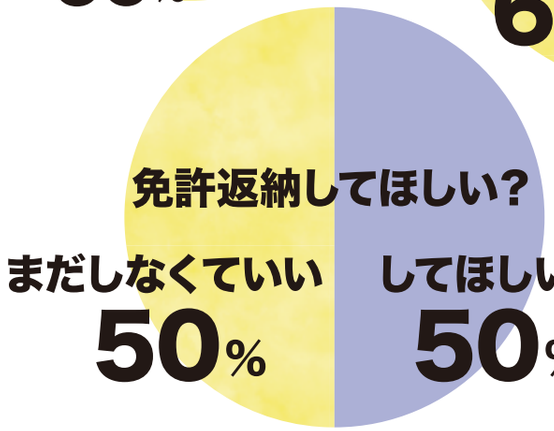
みんなは、どうなんだろ。

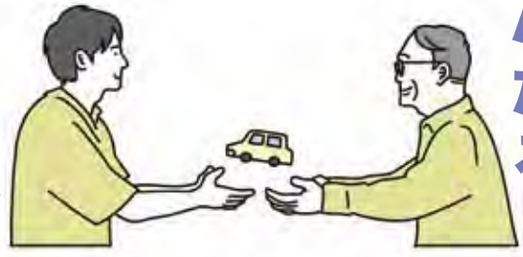
そろそろ免許返納してもらった方がいいのかなぁ、みんなはどうなんだろう？ということで、実際に聞いてみました。

70代以上の親を持つ50人の回答









「免許返納をしましたか？」の問いに約6割の人が「返納していない」との回答でした。返納した人のうち、親自身の意思で返納した人が6割。病気をしたことをきっかけにという答えが目立ちました。説得によって返納した人の中には「一度免許試験場に返納に行ったけど、免許証にかなりの執着があり返さず帰宅。後日家族の説得のもと、渋々返納しに行きました。いまだに免許証を無理矢理返納させられたと納得をしていない様子です。」と、説得に難航した人も。

「免許返納してほしいと思いますか？」の問いには、「してほしい」と「まだしなくていい」が半数ずつ。返納してほしいと思う理由は、「反応の鈍さ、見えにくそうにしていることが増えて、危険を感じるから。」

「とっさの判断力など親の衰えを感じるから、事故が心配。」

といった、親の運転能力に不安を感じることが、やはり大きな理由のようです。まだ返納しなくていいと思う理由は、

「心配だけど、日常生活で車がないと不便だから、難しい。」

「高齢ドライバー事故のニュースがあると心配になりますが、生活のため当分はないと思います。本人も返納の意思なしです。」

「公共の交通の便が悪く、子ども、孫も近くにいないため、買い物や病院には必要。」

「車があるから出歩ける、ストレスも解消できるという父母の気持ちを尊重しています。」

「遠出は控えてほしいが、何かの時には運転できる方がいいと思う。」

回答の多くは「交通の便が悪い住環境のため、買い物など日常生活に車が欠かせない」といった内容でした。とても難しい問題ですが、親は永遠に元気でいるわけではありません。運転はもう難しいというタイミングは必ず訪れます。離れて暮らす家族に配達できるネットスーパーを利用するなどして親の買い物の負担を減らしたり、生活のリズムを少し変えて、親を送迎するための時間を作るなど、私たちも変わることが必要になります。親にとって、私たちにとって、どうすることが最良なのかを今から少しずつでも考えて、準備していきましょう。

※交番、駐在所では受付していません。